

# 『仮面ライダーBLACKSUN』から見る、嫌悪の再生産

## —正義感受性理論による

### 差別者と被差別者の相互作用の分析—

権山（クオンサン）

#### 1. はじめに

「正義」とは<sup>1</sup>辞書によると『1. 人の道にかなっていて正しいこと。「-を貫く」「-の味方」』・『2. 正しい意義。また、正しい解釈。「四書-」「実はあたの語の-に非るなり」〈西村茂樹・明六雑誌三三〉』・『3. 人間の社会行動の評価基準で、その違反に対し厳格な制裁を伴う規範』という3つの意味を持っている。本稿では3つ目の意味である『人間の社会行動の評価基準で、その違反に対し厳格な制裁を伴う規範』の意味に注目する。

昔から今の時代まで人々は「小説」や「演劇」のようなメディアで正義を素材として使っていた。しかし、正義が昔の「ドラゴンクエスト」のように、ただ「主人公」や「人々を助ける」、「世界を守る」のような単純な使われ方だけではなく、「何が正義と言えるか」、「ただ守る、人々を助けることが正義か」のような使われ方をする作品が増えてきた。

これは現代のメディアにもよく見られる。2000年代の前のメディア作品では、上記の例のように悪というものを単純に無くすべき「災難」と規定し、それを倒すことがよく描かれた。

だが、最近では単純に倒すべき悪だけでなく社会批判的メッセージを含んでいる悪役だったり、悪ではなく正義の別の道という姿を見せる悪役も存在する。代表的な作品として『マーブル・シナマチックユニバース』の悪役「サノス」を例に挙げることができる。サノスは人類の維持のためには現存する人類の半分以上を犠牲にしなければならないと考え、これを実行する。その理由は、サノスの故郷が人類過剰による資源枯渇で滅亡したためであり、視聴者に彼の動機を納得させる大義を持っている。サノスは人類の保存という大義のために人類の半分以上を消すことを目的としている。方法は間違っているが、世界を維持させようとする目標は「正義」だと言えるだろう。

この「サノス」の事例が好評を得て以来、このような悪役がメディア作品で増え始めた。代表的に『仮面ライダーセイバー(2021)』で登場する悪役「仮面ライダーキャリバー」や「サ

---

<sup>1</sup>Weblio 辞書 [https://www.weblio.jp/content/%E6%AD%A3%E7%BE%A9#google\\_vignette](https://www.weblio.jp/content/%E6%AD%A3%E7%BE%A9#google_vignette)

ノス」と同じマーブルコミックスの悪役「ドクタードゥーム」も同様の傾向が見られる。

2022年、アマゾンプライムビデオで配信した『仮面ライダーBLACKSUN』は、ヘイトスピーチに関する問題点をよく見せる作品である。差別される方を怪人という人とはっきり区別できるものに設定し、怪人を差別する団体とそれに反対する人間や怪人たちの物語を描いている。

この作品は「悪とは、何か。悪とは、誰か。」というキャッチフレーズを元に「正義」というものに関して質問を投げける。差別団体が行ってきた暴力や暴言は確かに「悪」と言えるが、彼らが怪人に怯えることは理解できないわけではない。人の方も差別団体に対して抵抗することは当たり前のことだとしても、差別団体長を殺したり、後では人間の世界を破って怪人の国を作ろうとする暴力を伴ったデモをする。そのため、二つの団体は、自分たちが正義だと主張する。「正義」と「悪」の戦いではなく、相反される正義のぶつかり合いである。正義が倒すべき「悪」の存在は何だかが、この作品のテーマだと言える。

本研究は『仮面ライダーBLACKSUN』で行われた差別者(差別団体)と被差別者(怪人)の対立を分析することで、二つのグループの正義のあり方を明らかにすることを目的とする。被差別者(怪人)は長い間差別を受けてきて、それによる不平等な待遇と抑圧に対する抵抗運動を展開する。怪人たちは不平等に抵抗する自分たちが正義だと思えば、作品内でこれに対して無関心な怪人にも自分たちの正義な抵抗運動に参加することを強要する。差別者(差別団体)は被差別者(怪人)を「悪」として規定し、それを皆殺しすることが正義だと主張する。二つのグループの正義をAnna Baumert, Aya Adra, Mengyao Li(2022)によって提案された集団間の文脈における正義感受性理論を参考にしながら考察し、差別に対する抵抗が社会の分断や偏見を生み出すメカニズムを明らかにする。そして、正義を掲げた抗議がどれほど誤解や反発を招きかねないかについて検討する。

## 2. グループ間の文脈における正義の感受性理論

Anna et al. (2022)の集団間の文脈における正義感受性理論は、個人が特定集団と強く同一視する場合、個人の性格特性は集団間関係を解釈し反応する方式に影響を与えるという理論である。正義感受性(Justice Sensitivity、以下JS)とは不公正な状況に対する感受性を意味することである。例えば、ある人が自分または他人が不当な待遇を受けられた状況でどれほど簡単に怒ったり、罪悪感を感じ、行動しようとするのかを説明する。一般的なJSは個人に限られていたが、Anna et al. (2022)ではその枠を集団まで拡張させ集団間の文脈でどのように適用されるかをまとめられている。

表1 「個人的正義感受性」の4つの観点

タイプ	定義	主な感情反応
被害者感受性 (Victim JS)	不当な待遇を受けた時、敏感に反応	怒り、復讐心
受益者感受性 (Beneficiary JS)	不当な利益を得た時、敏感に反応	罪悪感、不便な感情

加害者感受性(Perpetrator JS)	他人に不当な行動をした時、敏感に反応	罪悪感、責任感
観察者感受性(Observer JS)	他人が不公正な待遇を見た時、敏感に反応	怒り、連帯欲求

このように JS は 4 つの観点に区別できる。被害者感受性とは、ある人が差別をされた時、自分が不当に差別を受けていることを認識して、怒ったり、抵抗したりすることである。この理論では、単に差別された人が被害に反応することではなく、受けた被害が正当ではないことを感じやすいことを「被害者感受性」(Victim JS)と呼んでいる。

受益者感受性(Beneficiary JS)は、自分が得た利益に罪悪感をもつものである。例えば、ある人が中古取引で相場より安いスマホを買った。だが、そのスマートフォンは盗品だったと分かると、受益者感受性の高い人なら自分が他人の奪われたスマートフォンで相場より安いスマートフォンという不当な利益を受けたという罪悪感を感じるようになる。すなわち、自分が得た不当な利益によって罪悪感や不便さに対する敏感さを受益者感受性と呼ぶ。

加害者感受性(Perpetrator JS)は自分が被害を招いた事実を認識し、罪悪感、羞恥心、反省の感情を感じ、道徳的責任を負おうとする性向である。この JS が欠如されていると、自分が加害者ということ回避しようとする。彼らは非難に敏感で、冤罪で自分が非難される被害者だと感じる。被害者感受性と似ていると思われるかもしれないが、観察者感受性(Observer JS)とは他人の不当な状況に対して敏感に反応することである。路上でスリに遭った人の物を返してくれたり、差別を受けていないがそれに反対する人(例えば黒人差別に反対する白人)のような場合を例に挙げることができる。

上記の記述では、「個人」と「集団」の差が目立たないように見えるかもしれない。しかし、Anna et al. (2022) は、個人の正義感受性と集団の正義感受性には大きな違いがあると主張した。個人の正義感受性にくらべて、集団の間の正義感受性は反応の対象が個人ではなく社会構造や制度になることがその理由である。「私が被害を受けた」の場合はその加害者個人や集団に対して謝罪と、報償を要求するが、「私たちが被害を受けた」はそれが社会的な「不義」だと認識する。被害の事例が個人の事例ならその一人だけの問題だと認識するが、それが数人で起きれば被害者はそれが集団の問題だということを認識し、構造的または社会的に問題解決を要求するということである。Anna et al. (2022) は、個人間の文脈における正義感受性で社会的、構造的な「不義」を認知することが出来ないと主張した。つまり、集団の視点なしに個人の視点と情報だけでは、構造的な不平等と単純な嫌がらせを区別することはできない。

Anna et al. (2022) は正義感受性が枠の中での解釈によって作用すると分析した。集団の視点ではなく個人の視点では、反復性と集団性、位階に基づく構造的な不義を区別することは不可能だと結論を出した。例えば、有色人種の学生が教師に繰り返し不利益を受ける場合、一人だけだとその人だけをいじめる様子だが、その対象が何人かがいると、被害者が有色人種という枠を作り、構造的な不義を認識できるわけである。

また、集団間の文脈における正義感受性は歴史的な脈絡と集団の社会的な位置が影響を与える。歴史的な脈絡として、『仮面ライダーBLACKSUN』の中で例を挙げる。昔の怪人たちは義務教育すら正常に受けられなかったが、現代の若い怪人が過去の世代が受けた差別からその怒りを受け取り、社会に憎しみを表して差別反対デモ参加につなげた。ここには、自分の経験だけではなく自分と集団の経験を共有し、それが差別に抵抗する集団の感情と同一化することが見られる。このように、個人レベルは個人的倫理によって作用するが、集団間では社会アイデンティティ、歴史的記憶が作用する。そして、集団同一化によって、正義感受性の発動有無が決められる。

集団の社会的位置は「劣位集団」「優位集団」「傍観者集団」の3つに分けられる。集団の社会的位置によって、Anna et al. (2022) は何が正義だと評価する基準が異なると説明する。例えば、貧乏な集団のウイルスの拡散を止めるために、国が集落を消毒すると知らせた。すると、何人かの優位集団（富裕層、中産層、庶民）は、「自分たちの村は消毒をしていないからやってほしい」と要求したり、「これは私たちの優位集団に対する差別だ」と主張する集団が現れる。また、貧しい集団の救済を望む傍観者集団（市民団体、社会運動家）は、この決定に歓迎したり、取り消されたりすることを防ごうとすることができる。すなわち、優位集団はこの決定を正義ではなく判断し、逆に傍観者集団はこれを正義だと認識したのだ。つまり、集団の社会的位置は単なる背景ではなく、正義感受性が作動する「形」そのものであることを示す。

『仮面ライダーBLACKSUN』の中でも「怪人」と「差別団体」、そして「差別反対団体」はこのような脈絡を土台に、各々異なる正義感受性のパターンを見せる。これらの理論を用いることにより、差別反対デモ等の社会運動や集団間衝突における参加者と反対者それぞれの感情や動機を分析することが可能となる。また、すべての立場が「正義」を主張するにもかかわらず、正義や方向性の違いによって対立が生じる背景を感情傾向と集団的脈絡の相互作用という観点で説明できる。さらに優位集団が被害者の正義感受性を強く抱く場合には構造的差別が認識されにくくなり、むしろ「逆差別」として正当化され差別構造再生産につながる可能性も示唆される。

### 3. 仮面ライダーBLACKSUN

#### 3.1 作品情報

『仮面ライダーBLACKSUN』は2022年アマゾンプライムで配信された仮面ライダー誕生50周年を記念して作られた作品である。『仮面ライダーThe first、next』、『仮面ライダーアマゾンズ』に続く成人ファンを狙った。1987年に毎日放送で放送された『仮面ライダーBLACKSUN』をリブートした作品である。

作品背景は日本で、そこには、戦争兵器として使用する生体兵器である怪人と人間が登場する。本作では、差別に抵抗する怪人と人間の間で主役たちが差別をなくすために奮起する話を描いている。

主人公は「南光太郎」は幼い頃、科学者の父親によって怪人王の候補として怪人に改造され、現代の2022年には怪人に対する差別や怪人社会の出来事を無視して社会から離れた生活している。そんな中、怪人との共存をテーマに国連演説した「和泉あおい」という少女の殺人依頼を受けることになる。だが、以前南が過去の知人「ゆかり」に与えた「キングストーン」を持っていることを「あおい」という少女が知ったことをきっかけに「あおい」を守ることになる。

『仮面ライダーBLACKSUN』は完全なる「善」というものではなく、誰が「悪」なのかについて視聴者に尋ねられている。差別される怪人の中でも、人間に恨みを持って襲ったり、犯罪組織に入ったりする者もいる。怪人の立場を代弁している政党「ゴルゴム」は同族を政府に売り、その政府は差別を助長する差別主義者が総理大臣であった。

『仮面ライダーBLACKSUN』での怪人は社会的な差別を受けている。作品の中で、過去の回想場面において、怪人は義務教育すら保障されず、総理大臣の息子を人質にすることによって得られた権利だった。

本作の監督である白石和彌は、『実話 BUNKA オンライン』の<sup>2</sup>インタビューで「日本における差別という自分と自分が真っ先に思い浮かべる光景は、<sup>3</sup>ヘイトスピーチを行う団体が朝鮮学校の前に立って拡声器で「日本から出て行け」とデモをしているシーンでした。朝鮮学校に通っている生徒に、何の罪もあるわけじゃないじゃないですか。」と答えている。この言説を鑑みても、『仮面ライダーBLACKSUN』は怪人差別を通して、現代社会の少数者の差別への社会批判も含めていると考えられる。

### 3.2 登場人物

南光太郎: 作品の主人公であり、黒いバツターの怪人、『仮面ライダーBLACKSUN』である。もう一人の主人公である秋月信彦の幼なじみで、二人とも父親によって最上級の怪人となった。過去にゴルゴム前身である怪人団体に参加し、怪人の根源である創世王を殺すことにしたが失敗する。その後、作品における現在の時点である2022年には怪人と人間の間の葛藤を無視し、裏世界の依頼を受けて金を稼いでいる。

秋月信彦: この作品のもう一人の主人公であり、銀色のバツター怪人、「仮面ライダーシャドームーン」である。南光太郎と同じ日に怪人になった。光太郎のように怪人と人間の葛藤に無関心だったが、知人の頼みで怪人団体の集会に参加した際に出会った新城ゆかりに興味を持つようになり団体に加入するようになった。現時点では無関心だった昔とは違って、怪人差別に関して先頭に立つ人物になった。

---

<sup>2</sup> 実話 BUNKA オンライン、(2022) 『『仮面ライダーBLACK SUN』の監督・白石和彌が語る想い「ライダーを現実の悪と闘わせたかった。」』

[https://bunkaonline.jp/archives/253?utm\\_source=chatgpt.com](https://bunkaonline.jp/archives/253?utm_source=chatgpt.com) (2025年7月24日)

<sup>3</sup> 人の内的属性(人種、宗教、ジェンダーなど)に基づいて、ある集団や個人を標的とし、社会の平和をも脅かす可能性のある攻撃的言説を指します。国際連合広報センター(2023)『ヘイトスピーチを理解する: ヘイトスピーチとは何か』(2025年7月24日)

和泉あおい: 作品の中で重要なキングストーンを持つ女子中学生である。元々は人間だったが、怪人間夫人ビルゲニアによってカマキリ怪人に改造された。人間だった時代、国連で演説をするほど怪人差別撤廃の先頭に立ち、怪人を差別する人を見るとすぐに文句を言うなど、不義を我慢しない性格を持っている。

小松俊介: あおいの学校の友達で、スズメの怪人である。怪人と人間の混血で父親が人間である。

堂波真一: 2022年現総理大臣である。過去に贅沢を楽しむ人間だった。当時、銃を持って怪人を撃つという話をしているのを見ると、怪人に対して祖父と同じように怪人を人間扱いしなかったと思われる。総理大臣になった現在は、表面的には怪人の差別を解消しなければならないと言っているが、裏ではゴルム党を操り、社会的弱者を拉致して怪人に改造して高位層に売り渡している。

ビルゲニア: 上級怪人で、過去には主人公たちの兄のような存在だった。現在は堂波の下で働いており、歳月が経つ間に人間を捕まえて怪人にする趣味ができる。その後は総理大臣、怪人たちに捨てられ、あおいに協力する。

### 5.3 作品用語

怪人: 原作の『仮面ライダーBLACK』のゴルゴム怪人をモチーフにしている。怪人たちを社会的弱者として表現するために、普通の特撮物の怪人たちとは違ってあまりにも弱い。上級怪人であるビルゲニアが警察機動隊を皆殺しにしたりもしたが、下級怪人は一般人数人が集まれば制圧でき、拳銃でも死ぬ。2000年の『仮面ライダークウガ』で登場した怪人「グロンギ」が作品の中盤に特殊弾が開発されるまで下級怪人も人類の武器で殺すこともできなかったの比べると、『仮面ライダーBLACKSUN』の怪人は非常に弱い。

普段は人間の姿で生活し、怪人の姿が別に存在する。だが、自分の意志通りにならない場合があるのか、激しく興奮したに怪人形態場合が変わったりもするようである。そのため、攻撃的であると誤解されて制圧される場面が出たりもする。

約50年前から人類と共存していて、ゴルムに属さない一般人として生きていく怪人も多い。怪人というが、人間と異種ではない人間を改造して誕生したため、人間と子孫を作ることができる。人間と怪人の間に生まれた子どもは作中に登場する。怪人家族や、怪人嫌悪団体の発言から推測すれば、そのような子どもは怪人として生まれるのが一般的なようだ。

ゴルゴン: 過去の主役たちとその知人たちが怪人差別撤廃を目的に作った「全学共闘会議」のような団体である。作中現在の時点で最上級の怪人3人がある種の事件で構成したもので、三神館を中心とする『ゴルゴム』に変えて活動している。2022年には総理大臣と共に創世王を利用して、怪人を増やして彼らを売ったり、命令したりしていた。

創世王: 怪人の起原であり、彼の血液で作る『ヒートヘブン』をたべると、怪人は不老不死を得ることができ、人間を怪人にすることができる。そのため、主人公たちは、怪人を生み出す創世王を殺すことで、怪人を自然消滅させ差別を無くそうとする。2022年現在創世

王は総理大臣に囚われている。

主人公である信彦と光太郎は、この創世王の候補であるため、総理大臣とゴルゴムに狙われる。彼らが持っている『キングストーン』を2つを集めば、新たな創世王が出来上がる。2022年、衰えて死んで行く創世王の代わりになることが総理大臣の狙いである。

### 3.3 研究課題

本研究は、『仮面ライダーBLACKSUN』の中で、描かれる差別者（ヘイトスピーチを行う集団）と被差別者（怪人）の対立構造に注目し、それぞれの集団がどのように自らの行動を「正義」として正当化し、互いに対立を深めていくかを分析することを目的とする。特に集団間の正義感受性理論「JusticeSensitivity Theory」の枠組みを利用して両者の感情的反応と正義認識の差に着眼しながら、なぜ二つの集団が「自分たちこそ正しい」と信じていて行動するのかを明らかにする。

また、作中における被差別者の非暴力的な抵抗がどのように描かれているかを通じて、差別への対応のあり方が対立の激化または緩和にどのように影響するかについても考察する。

## 4. 研究方法

本研究の目的は『仮面ライダーBLACKSUN』で起きる差別団体と被差別団体の葛藤の拡大と、JSの関係を明らかにすることである。そのため、『仮面ライダーBLACKSUN』で起きる差別団体と被差別団体の衝突・各自のデモ・演説場面などを分析し、彼らがどのような正義を持っていて、どのJSを示しているのか解釈する。集団間の正義感受性理論を土台に彼らがどのような位置にあるのか、どのように構成員を同調させるのかについて分析を進む。

そして、各JSがこの作品の中の役割を果たしているのか、解釈し彼らの行動を分析することで作品内のJSを照明する。

作品の分析順序は『仮面ライダーBLACKSUN』の進行によってますます事件が大きくなり、それに対する背景があるので、1話から最後話順に行くことにする。

## 5. 研究分析

### 5.1 あおいの演説とハエ怪人死亡事件

本章では、作品の第1話で観察者JSを持っているあおいの演説と共に、ハエ怪人がデモの途中で警察に銃殺される場面まで分析する。あおいの演説は、あおいが有名人になって後の事件に巻き込まれる原因になるきっかけであるが、その内容には観察者JSがよく表れている。そして、ハエ怪人の死亡事件は怪人の社会的な位置を間接的に現れる場面で、怪人のデモがさらに激しくなって差別者たちとの葛藤が深化される事件である。これらの場面を分析を通じて、観察者JSと差別者たちとの葛藤が深化を明らかにする。

## 場面1 (第1話 3:17—5:12)

「あおい」は怪人共存に関する演説を始める。UN ニューヨーク本部という国際舞台で行う演説なので英語で行われる。

自分の母親が怪人を差別せず、それで自分は怪人の友達が多く、怪人たちは自分のようにユーモア感覚があり、同じものを食べるなど人間と変わらないと述べる。怪人と人間の価値は地球より高く、人間と怪人の価値は1グラムも違わないと主張する。

この場面で行われたあおいの演説は、他人が不当に扱われる状況に敏感な観察者の正義感受性の時点をよく示している。あおいの個人の視点での演説だったが、家族の影響(集団の影響)で怪人に関する肯定的な認識が育ち、それによって、怪人との交流を始め、怪人という集団の被害に敏感に反応したのである。これに伴い、被害者集団のための行動としてUN ニューヨーク本部で怪人差別反対に対する演説をした。演説では、「怪人の差別、不平等な視線は正義ではない」と主張したのである。あおいは演説によって、バスで声をかけられる(1話、27:54)ぐらいの有名人になっており、人間社会において、怪人差別の問題が話題になったと予想できる。

このようにあおいは観察者JSを持っている人間で、社会の非正義に対する行動を促している。あおいの演説は怪人差別という構造的な問題を国際社会に訴えて、社会の変化を要求することがほかの人間や怪人の行動の原動力がなれる可能性を示す。観察者JSの特徴の「自分が被害者ではないにも関わらず、他人の不当な被害に共感し正義の実現を求める」をあおいが持っていて、その行動が正義実現のモデルとして提示されると解釈できる。

あおいの演説場面は作品の中で、観察者JSの劣位集団の被害者JSを代弁果たす役割を示す重要な場面である。

## 場面2 (第1話 5:13—9:55)

1話 5:13

縦に長い長方形の旗に日本国旗が描かれており、その下に怪人差別文句が書かれている。彼らが持っているカードには「怪人反対」「怪人粉砕」のような文句が書かれており、様々な絵や日本国旗が使われている。怪人から日本を守る会(差別団体)会長の「いがきわたる」が拡声器を手に「怪人は日本から出て行け」と叫び、会員たちとみられる仲間たちが会長に倣って「怪人を全部なくさなければならない」と同調する。会長に若い女性たちが写真を撮ってほしいということを見れば、若年層に相当な人気と支持を受けているようだ。

その渦中に彼らのそばで怪人たちが差別を止めてほしいというデモを進行中だ。両団体の真ん中で警察が衝突を防ぎ、制圧するための道具を持っている。警察の体が向かって警戒しているのを見ると、デモ隊の衝突を防ぐのではなく、怪人から人間を守ろうとしている感じがする。

怪人側のカードには黄色地に怪人は仲間だ、ヘイトを許さない、差別反対のような文言があり、まれに絵が描かれているものがある。同等の権利をくれと怪人を差別しないでください のように掛け声をかけながら隣にいる差別団体を見ながら訴える。

6:34 頃に赤いマフラーを巻いた差別団体側の男性が「消えろ、怪人」。「ハエのようにくつつくな」と挑発し、そこに一人の怪人が刺激を受ける。怒った怪人がハエの形をした怪人の姿を現し、暴走し始め、ある警察を捕まえる。これに対し、別の警察はその怪人に向かって銃を撃つ。銃によって気がついた怪人は手を上げろという警察の言う通りに行動するが、ハエ怪人に怯えたその警察を再び銃を撃発する。

それに衝撃を受けた怪人の大部分が全員怪人の姿が明らかになり、ハエ怪人が助けてくれと降伏の意思を示したにもかかわらず、銃を撃ち続けて射殺した。その後、警察はおびえた表情で同僚に連れ去られる。その光景を目撃している怪人たちは暴走し始めたが、警察側の隊長のように見える「くろがわ」という男性が怪人たちに我慢して逃げろと言いき、その後変身した怪人たちは皆拘束すると警告する。これに対し怪人側は解散し差別団体側は「怪人は行け」と叫びデモを進行する。

この一連の過程から、差別団体は公権力から怪人より保護を受けていることが見て取れる。そして警察に暴力を振るったが、その後警察の指示に従ったハエ怪人は結局射殺されており、怪人は人間よりも厳しく制圧されることがわかる。これに対し差別団体は優劣集団に位置しており、怪人たちは劣位集団に位置していることが把握される。

警察が「怪人の姿を現すだけで拘束する」と話すのを見れば、怪人の姿を現すことが不利に働くことも分かる。この過剰鎮圧事件によって、怪人たちのデモはさらに激しくなり、差別団体との衝突もさらに大きくなり始める。だが、その後のデモで警察は怪人たちに厳格に接し、過剰鎮圧を行う。一方、差別団体側には最小限の警告程度だけをする。この点について、次節で検討を行う。

## 5.2 過去の出来事

第2話から第3話までの『仮面ライダーBLACKSUN』の1972年に起こった事件を述べることにする。この物語では怪人が受けていた差別が明らかに出て、人間と怪人の葛藤の谷の深さを見せるパートである。過去の出来事を分析し怪人と人間の結集と、怪人が受けた差別を明らかにする。

場面3 (第2話 初め—1:29、2:45—9:55、37:25—39:53)

2話 初め—1:29

1972年の過去の回想場面である。この時期は、人間と怪人の葛藤が高まった時期である。怪人3人が人間1人を追いかけていることから始まる。人間は怪人を殺したことがないと言いき、怪人たちは人間の言うことを聞かずに殺してしまう。その後、人間たちが

ロープで縛られたサイ怪人に油を注いで焼き殺す。

その次に怪人たちがデモのために集まっている様子が示される。中心にいる怪人が「怪人だけが差別されるのはナンセンスだ」と主張し、その周辺で「日本政府に怪人の平等な権利を要求しよう」「人間たちの居住地侵略を許すな」というピケットを持っている怪人たちがそれに呼応する。

他のグループの姿も見せてくれるが、演説する怪人の話では怪人たちは不条理と人間以下の待遇と暴力も受け、暴力に鎮圧されたという。そして、合間合間に、政府を倒そうという掛け声も聞こえており、相当な不満が積もっていることがわかる。大通りには怪人たちがいっぱい、建物の中にもたくさんいるのを見ると、多くの人が集まったということも分かる。

2 話 2:45—9:55

怪人たちが集まっているところでビルゲニアが、人間たちは自分と宗教、イデオロギー、肌の色など違いを差別し、自分たちの力を解放させて平等な権利を勝ち取らなければならないと主張する。

2 話 37:25—39:53

怪人たちは差別に抵抗するため団体を作り、新城ゆかりという女性が交渉に応じない政府を助けるために首相の孫を拉致しようと提案する。何人かは反対するが、ゆかりの説得で計画を始める。

過去の怪人たちと人間の葛藤がどれほど激しかったかを示す場面である。最初に殺された人間が怪人を殺したかは分からないが、人間たちに殺されるサイ怪人はその時人間を殺した怪人の中にいないことから、両方とも関係のない人々を殺したものだと考えられる。

両方共、同族が殺害されたことで被害者 JS が強化され、加害者 JS が欠如された様子を見せている。強い被害者 JS と加害者 JS の欠如による葛藤が個人から集団間の JS に発展することを示す部分だと考えられる。個人、小規模だった過去より、集団で連帯してより強く自身の正義を訴え、両者間の葛藤が一時的な現象ではなく社会構造的問題に進んだ出発点である。

また、ビルゲニアが演説中に主人公たちを名指しして「怒っていますか」と個人の感情ではなく、集団の感情を注入しようとする。これは、怪人・人間の種族の争いと共に種族内の意見の違いがあること示唆する場面である。人間間においても、同様のことがある。第1話の26:50で、いがきがあおいに「お前は怪人ではなく人間だ」と言って、人間の味方になるよう強要する場面が見られた。怪人間においても、創世王殺害しようとする勢力とゴルゴムの違いがある。

### 場面3 (第3話 10:05—12:06)

3話 10:05—12:06

総理の孫堂波を拉致したゴルゴンが姿を見せている。堂波は自分を殺せないと思って偉そうに怪人たちに「この機会に私によく見せて。怪人の存在ぐらいは認めてやるよ」と言う。日本の総理大臣の地位は血統で継承するものではないにもかかわらず、自分が将来総理になるという確信を持っているようである（もちろん現在の時点で堂波の祖父は総理大臣になっている）。また、怪人の存在程度は認めるという言葉から見て、この時当時は怪人という種族が認められていないようだ。

以後、怪人と過去の総理の交渉場面が続くが、総理が怪人たちの処遇改善案を読んで「人間と同等な教育権と労働権を認める」と話す。怪人たちは1972年になってようやく正常な社会活動ができるようになったのである。しかし、これは表向きのことであり、首相は憲法を改正して軍を復活させる考えであり、20万の怪人票と戦争時の怪人を戦争兵器として活用する目的でこれに応じたのである。総理大臣は、「怪人はいつでも根絶できる」と脅迫する。そして怪人側はこれを受け入れる。これで、怪人たちは政党を作り、その政党は首相の手下として行動することになる。

怪人の指導者は総理大臣に怪人の同等な権利を認めたが、それは政治的な目的があった。これで怪人は社会進出を目指すことができることになった。しかし、これは道具的な目的で、怪人に対する認識改善や平等教育などのためではなかった。子供たちに怪人差別に対する適切な教育を行い、正しい加害者 JS を植え付けることで、2022年の未来に起きる葛藤を防ぐことができずだった。法律等にこのような記述がなかったことで、『怪人から日本を守る会』に代表される差別者が出たと考えられる。

### 5.3 激しくなる争い

第3話から第4話までの怪人と怪人嫌悪団体の内容を分析する。2022年に戻って、ハエ怪人事件によって、怪人のデモが激しくなる。その後、怪人嫌悪団体はそれに立ち向かって怪人の村を侵入することで、二つのグループの葛藤が大きくなっている部分を分析できる。怪人と怪人嫌悪団体のぶつかる場面を分析し、いかぎの加害者 JS の欠如、被害者 JS そして観察者 JS の交差を分析する。

### 場面4 (第3話 23:12—24:54—29:04)

3話 23:12

現在2022年、ハエ怪人の過剰鎮圧による殺害事件で怪人たちのデモはより一層激しくなった。前回のデモでは怪人嫌悪団体を怪人たちが追いかける様相だったが、今回はその逆になっている。前回のデモでは怪人だけが参加したが、今回は怪人嫌悪に反対する人間も参加したということもある。元々差別反対の文句があるカードもあるが、ハエ怪人の人

間姿写真と共にハエ怪人を助け出せというスローガンも追加された。

3話 24:54—29:04

怪人嫌悪団体はその反対側で待機しており、怪人たちは彼らと正面から向き合うことになった。これにより、警察は行進を停止させる。「いがき」は「勝手なデマをねえ、流しながら歩くのはやめてもらいたい」と怪人たちを挑発し始める。いがきが「先に暴力を振るったのは怪人だ」とし、「その怪人に過ちがあると言うが、怪人側はそれが射殺する理由にはならない」と反論する。だが、いがきは「害虫が出れば殺虫剤を使う。怪人が出れば拳銃を使う。駆除するのに理由があるか」と害虫と怪人を同一視し、怪人を殺すことに理由が要らないと再び反論する。その後、嫌悪団体側が怪人たちに近づくが、警察は言葉で言い、積極的に止めない。

この挑発で何人かの怪人たちも怪人化が進み、特に人間であるシュンスケの父親は大きく怒ると先頭に飛び出す。その後、いがきを押すが、いがきは立派な足が折れた演技を披露し、黒川がこれに怒り、俊介の父親を逮捕する。後ろから足を骨折した石垣は、よく立ち上がって逮捕される俊介の父親をあざ笑う。いがきは周辺を利用する能力が優れているようだ。

その後、両団体は街頭を広げるが、すぐに主演の一人である秋月信彦がバイクに乗ってデモに介入する。自動車の上に上がって「黙っていれば差別は続き徹底的に叩き潰される」と発言し、もっと怒れと扇動し始める。過去、ビルゲニアの怒っているかという質問に「特に」と言ったのとはずいぶん変わった信彦を見ることができる。

その後、「ここは人間だけの世界ではない」、「怪人が怪人の姿のまま生き続けられる。そんな世界を俺は望んでいる」、「それは何も…特別なことじゃないはずだ」という言葉とともに怪人に変身する。その発言の中であおいは自分の怪人友達の俊介を眺めるが、少し恐怖心のある目つきが見える。その後、信彦は喝采を浴びながら事件は終わる。

ハエ怪人の死によって、さらに激しくなる怪人たちのデモである。「いがき」という中心点があった嫌悪団体とは違い、怪人団体にはなかった中心点ができる瞬間である。とくに、嫌悪団体の『いがき』は人間ではない生き物と共存不可能を主張し、信彦は怪人らしい生き方を叫びながら、それぞれの正当性を主張している。それによって、構造的な葛藤や敵対心が高調される結果を生み出す。怪人を人間ではない生き物に規定することで、自分たちの差別（加害）を正当化している。これは、いがきは不当な加害に対して罪悪感を持つ加害者 JS が欠如している人物であることを示している。

今後の展開では、いがきの JS が怪人の被害者 JS を刺激する。それによって起こる怪人の抵抗は、またいがきとその仲間たちの加害者 JS を低下させることで、両方の行動が暴力的になるきっかけを提供する。

場面 5 (第 4 話 21:10—24:54—29:04)

4 話 21:10

怪人たちが集まって住む所に差別団体が進入することから始まる。「公共の時代に占拠を止めろ」、「なぜ日本を離れないのですか?」と言って、国から出て行けと周りの怪人たちを皮肉る。その後、「このような下層民を食べさせるのに、なぜ私たちが苦勞して稼いだ税金を浪費しなければならないのか」と言って、まともな経済活動をしている怪人たちを非難する。

これに対し、俊介は「私たちがあなたたちをいじめたの?」と理由を尋ねるが、いがきは「あなたたちが美しい国を台無しにしているじゃないか」と俊介を押しつけ、ある怪人の家に無理やり入る。家に入って家に細菌とウイルスがいっぱいだとし、一次元的な非難を浴びせ始め、その怪人の姿の撮影までしている。

家を出た後、怪人と人間がここで子供を産むことを話し、怪物を社会構成員として受け入れる理由がないとし、周辺人を扇動する。これに対し俊介の母親が「いがき」に「お前たちが怪物だ」と反撃するが、「いがき」は「私たちが怪物ならお前たちは怪物の下だ」と言い返す。怪人化した俊介が近くの建物の上に上がり、「いがき」にうんちをして「いがき」を退かせる。

嫌悪団体は怪人のに対して「公共の時代に占拠を止めろ」と非難しながら、「このような下層民を食べさせるのに、なぜ私たちが苦勞して稼いだ税金を浪費しなければならないのか」と、怪人の差別を正当化する加害者 JS の欠如をみせる。

いがきに向かって俊介は「私たちがあなたたちをいじめたの?」と言い返す。自身だけではなく今まで見てきたほかの怪人（挑発によって射殺されたハエ怪人や今住宅侵入された怪人）の不当な待遇についての俊介の反抗である。したがって、俊介は差別の中心点であるいがきに怒り現す被害者 JS とみることができる。俊介がいがきに向かって排泄することで、いがきたちは退却するがこれは根本的な解決法ではなく、俊介が嫌悪団体に恨みを得るきっかけとなる。

中心点になった信彦は創世王を殺すために、怪人たちを訓練させ、創世王がいるゴルゴムを襲撃した。しかし、強力なゴルゴムの上級怪人や堂波に制圧される。

#### 5.4 俊介の集団暴力殺害と信彦に殺される「いがき」

怪人嫌悪団体の村侵入事件によって、二つのグループの恨みが最高潮になる。それによって俊介が嫌悪団体に殺される。それを見た信彦は、今までの恨みが爆発し、いがきを殺害する場面である。

この場面を分析し、加害者 JS の欠如・被害者 JS の極端的進化の転換点を明らかにする。

場面 6 (第 7 話 29:19—31:22、37:00—45:35)

7 話 29:19

俊介が道を歩いている途中、いがきたちと出会う。いがきは自分たちの前では俊介に「火さえあれば言ってみろ」と挑発する。俊介の返事がないと、一人では何も言えないと言って通り過ぎる。俊介はいがきを人種差別者だと非難し、唾を吐く。これに怒った「いがき」たちは俊介を引っ張って集団暴行する。通りかかった人々は関心を示してはいるが、街角を守る差別団体会員が遮断する。これによって、俊介は死ぬ。

37:00

信彦はゴルゴン堂に入った人員の中で唯一生き残った俊介を確認するために俊介の家に向かう。だが、俊介は彼の家の近くの柱に「口臭の怪人はこうなる」という立て札を首にかけられていた。

42:21

イカギは再び街の真ん中で、「怪人たちは国の発展に役立たない」と嫌悪発言をしており、俊介の父親は機会を狙ってイカギをナイフで殺そうとする。その瞬間、信彦は怪人の姿で登場し、イカギの頭を両手でつかむ。イカギは最初は抵抗してみるが、すぐに助けてくれと祈る。しかし、信彦はイカギの頭を両手で押さえつけることで殺害する。隣の会員たちは何もできず、言葉だけで放っておくばかりだったが、イカギが殺害されるとすぐに瓦解する。

これによって、信彦は人間を排除する怪人だけの世界を目的にし、ゴルゴムを自分の味方にする。

俊介は怪人と人間のハーフであるが、怪人社会の一員として育ち、被害者 JS を持って行動する人物である。そのため、いかぎたちの差別的な態度を非難したが、暴力の犠牲者となった。その俊介の死を利用して、いかぎは再びヘイトスピーチを行う。それをみた信彦は怒りでいかぎを殺すことで、被害者 JS の極みを見せた。

この事件で、『怪人から日本を守る会』は以降の展開で登場がないことから、完全に崩壊させられたと思われる。そして、信彦は以降、社会に文句がある怪人を集め、ゴルゴム内の親総理派を構築し、創世王を手に入れる。その後、自分が怪人の王(創世王)になるため、幸太郎と戦って、負け、死亡する。

## 5.5 怪人の真実と怪人になったあおいの演説

ビルゲニアに改造されたあおいが政府に裏切られたビルゲニアと協力して怪人に対する真実を知り、それを暴露する場面だ。観察者から被害者に転換されたあおいが映像画面で観察者 JS を刺激する発言をし、視聴者に差別は実在し、目を向けて怒りなさいと刺激する。

9話 37:24

国連で再びあおいが画像で英語でスピーチを始める。ここであおいは怪人が日本が作った改造人間であることを明らかにし、自分も怪人として改造されたことを明らかにする。あおいはこれに対し、人間と自分を怪人にした存在に憎悪を感じると言い、自分は共存について気楽に話すことはできないが、怪人であり人間として意志を受け継ぐと言う。「自分のアイデンティティを取り戻すために、人間であれ怪人であれ戦っていく」と決意の言葉を伝える。そしてあおいの画面に顔を近づけながら次のように言う。

「ねえ、君  
画面の向こうで私の話をシラケた顔で聞いているあなた。  
あなたは どうして怒らないの？  
関係ないって見て見ぬふりをして笑ってごまかしてる。  
これはあなたが生きている世界で起こってることなんだよ。  
差別は間違いなくそこにある。  
差別は誰かの生きる意味を奪う行為だ。  
生まれてきた喜びを奪う行為だ！  
人間も怪人も、命の重さは地球以上。  
1グラムだって、命の重さに違いはない。  
だから、私は戦う。奪い合わない世界になるまで。  
これは私の...私たちの宣戦布告だ！」  
その後、あおいは画面を消す。

あおいは怪人=人間であることを告げ、これまで人間ではないという差別に真っ向から反論した。そして嫌悪団体には人間の味方をしろという圧迫や、怪人に改造された被害に怒ると被害者 JS を持ち出す。しかし、自分が過ちを犯した時の反省も一緒に見せながら、道徳的に正当だということを強調する。自分の演説を聞いている視聴者に、「なぜ現実に存在する差別に目を向けるのか」と一喝することで、視聴者の観察者 JS を刺激する。怪人と人間の生命の重さは同じだとして平等を主張し、自分たちの怒りと闘争を正当化することで平等だけを話した観察者の視点の前の演説と異なる結論を語る。「私たちの闘争だ」とし、集団全体が被害者であり、自分だけの考えではないことを強調する。

## 6. 考察

『仮面ライダー-BLACKSUN』には、加害者 JS、被害者 JS そして観察者 JS を見ることができる。本研究では、特に加害者 JS の欠如や被害者 JS が様々な事件の影響によって、強化され、作品が進むほど激しくなるぶつかり合う様相に注目した。怪人たちの被害者 JS は昔か

ら繋がっており、単純な感情ではなく、不当な差別に対抗する主体としてデモという行動のきっかけとなっていた。1972年当時の堂波が「怪人の存在を認めてあげる」という話す様子を見ても分かる通り、1972年まで怪人は教育を受ける権利さえなく、存在すらも否定されるこの不当な差別を受けてきた。2022年にも怪人は「差別は悪い」という認識に基づいて、差別と戦っている自分たちが正義だと思っていた。

それに対して『怪人から日本を守る会』に代表される差別者たちは、怪人を人間として認めていない様子が見られた。すなわち、「人間ではない者に差別は存在しない」という忌まわしい対象の非人間化を主張する。そして、優位集団の加害者 JS の欠如が現れ、怪人が日本に生きることが自分たちの被害だと信じている。怪人の村に侵入し、自分たちの税金で怪人が恵まれたと言ったことがその例である。

とくに、作中の怪人の村侵入事件は、「なぜ私たちが苦勞して稼いだ税金を浪費しなければならないのか」と怪人が税金で特典を受けていると主張する。この発言から見えることは、彼らが自らを被害者と位置づけ、加害者の責任を回避しようとする加害者 JS を低下させていることである。しかし、怪人たちにとっては、差別によって町から追い出された結果、この村で住むことになったということであり、不当な待遇の象徴と言えるところである。よって、この場面は単なる個人の感情ではなく、互いの JS の相互作用で社会的な葛藤が深まる場面である。

怪人と差別者たちの争いの原因は、二つのグループが考えている「怪人」という存在が人権を持っているかないかに分かれていることにある。「怪人」が人間と区別できる特徴を持っていることは事実である。しかし、「怪人」は人間と子供を作れることができたり、意思疎通や学習能力、そして人格を持っていることと変身前の姿が人間と同じである。人間と別の生き物と言うには難しいように描かれている。

Rousseau et al. (2023) は嫌悪する対象を非人間化することで、対象の道徳的地位を剝奪すると述べた。作品の差別者たちも怪人を「害虫」、「細菌」として扱い、自分たちの暴力を正当化していた。

さらに、Anna et al. (2022) は加害者 JS が欠如されていると「不当に責められている」と感じる傾向を言及した。怪人から日本を守る会は自分たちが怪人を差別することを回避し、怪人を非人間化することでそれを回避していると考えられる。

初めてあおいが演説する場面では観察者の正義感受性(観察者 JS)が見られると述べた。あおいは怪人ではないが、家族(実の母親、養母)という集団の影響で怪人に対する差別に抵抗感をもっていた。従って怪人の差別に正義を訴えて、被差別者たちと共に行動する姿をみせる。

『仮面ライダーBLACKSUN』では「加害者 JS の欠如」「被害者 JS」を主に扱い、さらに「観察者 JS」も含め、それぞれの JS が強化されることによって葛藤が描かれる。これは単なる善悪の対立ではなく、社会的な差別構造や人物の心理のメカニズムを可視化している。怪人の人間性や怪人と人間の混血のように怪人が人間の亜種の描写は、差別者たちの「非人間化」

の矛盾を表している。そして、「観察者 JS」が現代社会の差別を見逃さずに、人たちの行動を催促する社会的な役割を勤める可能性を示唆している。

## 7. 終わりに

本稿では『仮面ライダーBLACKSUN』を通じて正義感受性 (Justice Sensitivity) 理論を基盤に分析を行った。作品内の怪人に対する差別とそこでの感情的な反応や行動を被害者・加害者・観察者3つのJSに分けて行い、JSが彼らの葛藤の中で複雑に交わり、行動や言動に影響を与えることを明らかにした。

作品内に見られるJSの連関性に注目して分析することによって、登場人物たちのJSは互いに影響を与え、相手のJSが行動の契機になった。そして、自分たちのJSを強くし、連帯の強化またはさらなる低下を起こした。その結果、両方のグループは崩壊・墮落し、破滅を迎えたことがわかった。

『仮面ライダーBLACKSUN』は単純な虚構ではなく、現代日本の少数者の差別を反映しており、正義感受性という心理学理論が嫌悪のメカニズムの分析に有効であることが確認できた。とくに怪人の蓄積された憤怒(被害者JS)、差別者の加害を正当化(加害者JSの欠如)すること、そして観察者JSの介入が複雑にすれ違い作品内の対立を深化させるところが印象的である。

本研究はフィクションの作品内の社会的葛藤を分析し、社会内の「正義」とは何かを聞き直すきっかけを提示するものである。本稿は『仮面ライダーBLACKSUN』だけを分析し、加害者・被害者・観察者の正義感受性を考察した。今後の研究では、より多くの作品にこの正義感受性理論を適用させ嫌悪のメカニズムを分析をさらに進め、過去や現代社会にも適用したい。

## 参考文献

- (1) Weblio 辞書、[https://www.weblio.jp/content/%E6%AD%A3%E7%BE%A9#google\\_vignette](https://www.weblio.jp/content/%E6%AD%A3%E7%BE%A9#google_vignette) (2025年7月14日)
- (2) 実話 BUNKA オンライン、(2022) 『『仮面ライダーBLACK SUN』の監督・白石和彌が語る想い「ライダーを現実の悪と闘わせたかった。」』[https://bunkaonline.jp/archives/253?utm\\_source=chatgpt.com](https://bunkaonline.jp/archives/253?utm_source=chatgpt.com) (2025年7月24日)
- (3) 国際連合広報センター(2023) 『ヘイトスピーチを理解する：ヘイトスピーチとは何か』[https://www.unic.or.jp/news\\_press/features\\_backgrounders/48162/](https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/48162/)(2025年7月24日)
- (4) Baumert, A., Adra, A. & Li, M. *Justice Sensitivity in Intergroup Contexts: A Theoretical Framework*. *Soc Just Res*35, 7–32 (2022). <https://doi.org/10.1007/s11211-021-00378-9>
- (5) Rousseau, D. L., Gorman, B., & Baranik, L. E. (2023). *Crossing the Line: Disgust, Dehumanization, and Human Rights Violations*. *Socius*, 9. <https://doi.org/10.1177/23780231231157686>(Original work published 2023)